

クリスマスのおくり物

佐山 裕子



「パパ、このお人形買ってー !!」

「ぼく、これが欲しいなあー !!」

もうすぐ クリスマス、家々にはツリーが飾られ、

町にも赤や青の電気が飾られ、皆クリスマスがくるのを

いまかいまかとまっています。

おもちゃの前では子供たちが、父親や母親の手を取り、

このおもちゃが欲しいのだの、と、さわぎたてています。

その様子を遠くからさびしげにみつめる少年がいました。

名をポールといい、今は母と二人、近くのアパートに住んでいます。

船長だった父は、5年前のクリスマス、船の転ぶくで、行方不明と  
なってしまったのです。

「クリスマスなんて、こなきやいいんだ・・・」

ポールはあてもなく、ふらふらと歩いていました。おもちゃの前と  
通りかかったとき、ふいにだれかに肩をたたかれました。

「ぼうやはどんなおもちゃが欲しいんだい？」

見ると、真っ赤な服を着たおもちゃやのサンドイッチマン、  
サンタクロースのおじさんが立っていました。

「君は、何が欲しいんだい？　ここのおもちゃ屋には、  
いろーんなおもちゃがいっぱいあるよ」

「ぼ、ぼくの欲しいものは・・・」

そう、ぼくの欲しいものは、こんなんじ　やない・・・、  
ぼくのほしいのは：



「なんだい、言ってごらん、」

「ぼくの欲しいのは、こんなくだらないおもちゃなんかじゃない!!」

「ぼくの欲しいのは：　と、　父さんだ!!」

と言うとポールはやみくもに走りだしました。涙で目が見えなくな  
るのも忘れて・・・。

「昨日はあんなひどいこといっちゃってごめんなさい・・・」

次の日も、ポールの心をうらぎるかのごとくよく晴れた日でした。

「いや、いいんだよ、おじさんはなにも気にしちやいないからね。

ところで君、昨日お父さんが欲しいって言ってたけど、それはどういう意味なんだい？」

ポールはしばらく、下を向いたまま、だまっていたが、

「ぼくの父さんは5年前のクリスマス、船のてんぷくで、

ゆ、行方不明……に……」

「それは、悪いことを聞いてしまったなあ、

ごめんよ、悪<sup>あく</sup>ぎがあって言ったわけじゃ……」

「いえ、いいんです、ぼくがいけなかったんです、5年前のことなにかに、いまだにくよくよしてて……それよりも、ぼくの父さんの話聞いてくれますか？」

「ああいいとも、君の父さんはどんな人だったのだい？」

ポールは笑<sup>えが</sup>顔をみせると、さも自<sup>じ</sup>慢<sup>まん</sup>気に話始めました。

その日は今までなく、よろこびにみちあふれていましたか？」なぜか、

このサンタクロースのおじさんとは話がよくあい、

まるで自分の父親と話しているようにさえ思えてくるのです。

この人がぼくの父さんだったらー  
日に日にポールはそう思うようになってきました。  
そしてクリスマス、ポールはいつものように、  
おもちゃやに行きました。

バツタン

「いらっしやい」

「あの一、サンタのおじさんいますか？」

「やあ、君か、なんだかしらんけど、用事があるとかいって今日は

休みだよ・・・こっちもこまっているんだよね」

今日がやまだというのに、休んじまって、ほんと、しょうがないや・・・」

「あ、それじゃいいです、さようなら」

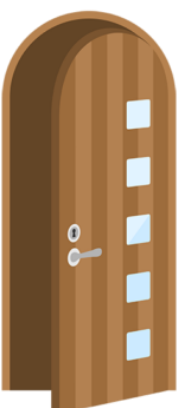
バツタン

「なくんだ、いないのか・・・」

ポールは、晴れわたった空を見上げ、

「今年も、雪、ふんないのかなあ・・・」

ポールはいつのまにか自分の家のドアの前に立っていました。



「ただいまあ、」

「おや、ポール、おかえりなさい。いったいどこに行ってたの、はやく、クリスマスのしたくをしましょう。」

「うん・・・」

また今年も母さんと二人だけのクリスマスかあ・・・

せつかく今年サンタのおじさんをさそって楽しくやろうと思っていたのに・・・「ポール、いつまで玄関げんかんにいるのおく、早くこっちにきて手伝ってちょうだい!!」

「はい、いまいくよ!!」

「メリークリスマス、ポール。」

「メリークリスマス、母さん。」

ポン ポーン



シャンペンのふたがはじかれ、つづいて、二人のグラスに、

そそがれました。

「また、二人つきりクリスマスになってしまったわね・・・」

「う、うん、そ、それよりもこのローストビーフりょうりとってもおいしい

よ!! やっぱり母さんの料理は世界一だ!!」

ポールは話をそらそうとローストビーフにくらいつきました。

まあまあポールったら、そんなにいそいでたべなくても、

ローストビーフはにげていったりしませんよ。

・・・今年もまた、雪、ふらないみたいね・・・

そういえば、5年前のクリスマス以来、

ふつつりとふらなくなったわ・・・

「・・・うん。」

窓の外では星がまるでネオンかなにかのように、

キラキラと光っていました。

トン、トン、



とをたたく音が聞こえてきました。

「どなた？」

ボタン 入ってきたのは・・・

「サンタのおじさん・・・・・・・・」

「あ、あなたはだれなの?！」

おじさんは、しずかにぼうしとひげをとりました。

「あっ あなたは・・・・・・・・」

「えーと、父さん?！」

その顔はまぎれもなく、父の顔かおでした。

「母さん、よく私の顔をおぼえてくれたね・・・」

「・・・あなた、いったい今までなにをしてたの、

私達、どんなに心配したことか・・・」

「すまない、——5年前、私の船ふねは転ぶくしてしまい、

私は海になげだされた、そばにあった木にひっしにつかまって

何日も海をただよい、ある町に流れついた、

私はその時のショックで記おくそう失になってしまったのだ。

いろんな町てんてんに転々と移り住み、やっとこの町に来た。そしてポールと



出会い、話をしていくうちに、記おくがもどったのだ。

・・・長い間またせてすまなかった。

「父さん!!」

ポールと母は、父にだきつき、その、あたたかいうでの中で泣きじゃくりました。

「さあさあ二人とも、涙なみだをふいて、パーティーの続きつづを始めよう」

「うん」ポールはいままさに「幸福こうふく」という名のプレゼントを受け取ったのです。

——メリークリスマス、サンタさん、こんなすばらしいプレゼントとをありがとう。

そして——「父さん」——「ん、なんだい？」

「メリークリスマス」



外ではいつのまにか星は消え、静かに、雪がふっていました。

——終わり——